朝日歌壇 俳壇

〈街かど　上野Ⅲ〉　岩尾恵都子

短歌時評　恋の歌のようでいて

小島　なお

大河ドラマ「光る君へ」には若き日の紫式部や清少納言が登場し、私たちにとっては教科書のなかの人物である彼女たちの生き生きとした感情の揺れや才知の一端を窺い知れるようでおもしろい。

『源氏物語』と『枕草子』はあまりにも有名だが、物語や随筆の書き手としてすぐれた二人は、はたしてどんな短歌を詠んだのだろう。百人一首に採られているそれぞれの短歌を見てみたい。

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな　紫式部

歌意は「久しぶりに会って『なつかしい』と思う間もなく、雲に隠れる月のように、あなたは帰っていってしまった」。相手は幼なじみの女友だち。せわしなさに呆れつつ、名残惜しい気持ちがにじむ。雲の向こうの月のかがやき。それは源氏物語で一人一人の姫君に光をあてて慈しんだ彼女の眼差しとどこか重なる。

夜をこめて鳥のそらねははかるともよに逢坂の関はゆるさじ　清少納言

歌意は「夜が明けないうちに、鳥の鳴き真似をしたって私の逢坂の関は開きませんよ」。仲の良かった才英の藤原行成と夜更けまで雑談に興じたのちに贈りあった歌。鶏の声を合図に開く関所を鳴き真似をして夜のうちに開かせたという函谷関の故事を踏まえている。「逢坂の関」は男女の仲になることの比喩で、それは「ゆるさじ」と。ウィットに富んだ彼女らしいセンスの光る返歌。

二首とも恋の歌のように見えてそうでないのがいい。二人の文学的、人間的な気質がよく表れていると思う。（歌人）

◇5月5日の歌壇俳壇面は休載します。

風信

阪西敦子句集「金魚」　朝日俳壇「俳句時評」前筆者の第1句集。1984年から2022年までの作品を収録。「金魚揺れべつの金魚の現れし」「ラガーらの目に一瞬の空戻る」「人の上に花あり花の上に人」。跋はホトトギス主宰の稲畑廣太郎。（ふらんす堂・3080円）

◆高山れおな選

食堂の仔猫トラットリアの寅　（富士市）村松　敦視

マンネリの波こそよけれ震災忌　（東京都足立区）無京　水彦

葱坊主傷痍軍人たちんぼう　（香芝市）土井　岳毅

引く雁にひとり手を挙ぐ畑の人　（東京都足立区）望月　清彦

日本が好きで黄砂は空の旅　（岡崎市）津上　昌一

春泥を楽しむ子等と俳人と　（今治市）横田青天子

てふてふのカーブミラーに恋をして　（名古屋市）鈴木　修二

鷹鳩と化しライオンの大あくび　（福岡市）高山　國光

ぼろぼろの歳時記捲り春を詠む　（川西市）上村　惠子

お浸しも味噌汁の具も茎立菜　（会津若松市）湯田　一秋

【評】村松さん。トラットリアは大衆的なイタリア料理の店。同じ内容を別の語で言い換える構造に、童謡めいた味わいも。無京さん。「マンネリの波」の逆説的な表現が強烈だ。土井さん。葱坊主から敗戦後の情景へ飛躍。なぜか説得力あり。

◆小林貴子選

初花や人去るを待ちもう一度　（藤岡市）飯塚　柚花

仮面夫婦などなき恋の雀かな　（横浜市）飯島　幹也

庭蜥蜴だんだん餌に反応す　（川崎市）沼田　廣美

蜷の道やつと敦賀へ新幹線　（河内長野市）西森　正治

寄席を出て独り笑ひの遅日かな　（東金市）村井　松潭

てんつくとてんつくつくとつくつくし　（福井県越前町）珠凪　夕波

いらぬものばかり手に入る花吹雪　（北名古屋市）月城　龍二

家族にはわざとむっつり合格子　（多摩市）金井　緑

潮干狩お尻同士がぶつかって　（京都市）山口　明紀

歳時記てふ物の缶詰桃の花　（長崎市）下道　信雄

【評】一句目、待ちに待った桜の開花を堪能しようという俳人の心意気はこういう行動に表れる。二句目、雀の恋は素直で可愛らしいが、人間関係は紆余曲折が多い。それゆえ文学も生まれる。三句目、そのうち我が家の〝飼いトカゲ〟になるか。

◆長谷川櫂選

佐保姫の姿眼で追ふ赤子かな　（境港市）大谷　和三

白魚に金色の管ありにけり　（津市）中山　道治

春愁や抜けばまた立つティッシュペーパー　（我孫子市）藤崎　幸恵

原発に沸きし福島春惜しむ　（福島県伊達市）佐藤　茂

貧しさの果て一握の種を蒔く　（一宮市）岩田　一男

うきぐもといふ物体や春の宙　（彦根市）阿知波裕子

能登に来る燕は我が家探しをり　（市川市）をがはまなぶ

いかなごのくぎ煮や母の三回忌　（紀の川市）中島　紀生

永き日や再配達の荷の届く　（玉野市）北村　和枝

春愁や髪薄ければなほさらに　（福岡市）釋　蜩硯

【評】一席。赤ん坊にだけ見えるものがある。それに気づいている大人がいる。二席。一寸の白魚の微少の世界。春の金色である。三席。あの折り方は誰が考案したのか。命あるかのように。十句目。髪は薄く、愁いは濃く。ままならぬ世。

◆大串章選

生きがひは生きがひつくること日永　（塩尻市）古厩　林生

瀬戸内の島の山々みな笑ふ　（埼玉県宮代町）鈴木　清三

病みて知る他人の痛みや春の夜　（岩倉市）村瀬みさを

開花かな標本木に人だかり　（東京都練馬区）上田尾義博

蜜蜂の羽音に蘂のゆるびけり　（八代市）山下しげ人

春の雨女将の笑みの謎めけり　（柏市）藤嶋　務

白鳥の地球を丸く帰りけり　（所沢市）木村　佑

路地曲がること嬉しがる春の風　（垂水市）瀬角　龍平

春月の地球の病みをみつめをり　（札幌市）伊藤　哲

忠魂碑囲み今年も桜咲く　（美祢市）杉野　昭朗

【評】第1句。生き甲斐をつくることが生き甲斐とは！　なるほど、ポジティブな生涯をおもう。第2句。「山々みな笑ふ」が大らかで健やか。春の息吹を感ずる。第3句。「病みて知る」ことはいろいろある。それを心の糧に生きてゆこう。

☆は共選作。入選作はデジタル版にも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。歌壇はネットでも投稿できます（週に2首まで）。QRコードから。